しを慶長の頃、むかしの白の製に定め給ふに、當時白の製を知りたるは上林の後室のみ成し故、婆々昔と御銘し給へり、祖母昔と もいふ 但し白青といふは畑の名といへり、

七園の歌　森、祝、う文字、川下、奥の山、旭の麓、琵琶をひく也、○中略

薄茶

極詰　別儀　極揃　別儀揃　宇治の茶園此四名の外ニなし

茶一斤　二百目也

濃茶　一袋二十目入、半と云は十匁入、小半と云は五匁入、

半の直段、下中三匁九分五匁七厘、昔といふ名よりは、南鐐一片の禮也、

別儀揃　一斤ニ付　十三匁　極揃　同　廿六匁　別儀　同　五十二匁　極詰　同

七十八匁

通例の濃茶、此直段と同じ、綾森は三割増、

宇治いづれの家にても此定りなり、三十目代、四十目代といふは、好の茶といふて、定直にあらず、

初昔　後昔は壺の大小にかゝはらず、黄金一枚、

此茶賣物にてはなし、據なく所望に依て讓り受取時、一袋金百疋、半袋南鐐一片位の禮也、

〔柳營新編年中行事二月〕一宇治の茶被召上次第、上林家之起り、其外茶師家々の名付并茶之銘、

宇治茶之次第

一茶一斤ト云は貳百目也

一はんたい壹つと云は拾匁也

一上之初むかし　上白むかし　中後むかし　下むかし

上林味トひかへのゑん